

氏 名 (本籍)	荻 田 美 穂 子 (京都府)
学 位 の 種 類	修 士 (看護学)
学 位 記 番 号	修 士 第 9 0 号
学位授与年月日	平成19年3月26日
学位論文題目	脳・神経疾患患者における静的・動的バランス指標 および簡易運動能力指標と転倒経験との関連

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	92	(ふりがな) 氏 名	お ぎ た み ほ こ 荻 田 美 穂 子
修士論文題目	脳・神経疾患患者における静的・動的バランス指標および簡易運動能力指標と転倒経験との関連		
<p>【背景および目的】高齢社会の到来とともに、脳血管疾患やパーキンソン病などの神経変性疾患の有病率は増加傾向にある。脳・神経疾患への罹患は転倒の危険因子であることが報告されており、脳・神経疾患患者の転倒予防は療養生活の質を維持する上で重要な課題である。しかしながら、脳・神経疾患患者の転倒要因は疾患の特徴から一般集団とは異なっていることが予測される上、脳・神経疾患集団の中でも疾患別に保有する転倒要因が異なっている可能性があり、これらを考慮した検討が必要である。本研究は、脳・神経疾患患者の転倒経験および転倒関連要因の保有状況を記述すること、並びに過去1年間の転倒経験の有無と関連する要因をバランス指標および簡易運動能力指標を中心に、疾患別に検討することを目的として行った。</p> <p>【方法】2006年6～12月に関西圏2病院にて神経内科専門医より脳卒中あるいはパーキンソン病と診断された外来通院中の患者のうち、自力歩行・意思疎通が可能な患者210名を対象とした。調査協力同意が得られた195名に対して転倒要因に関する聞き取り調査及び身体機能に関する計測を行った。静的バランスの評価指標として開眼条件下重心動揺、動的バランスの評価指標としてFunctional Reach Testを用いた。また、簡易運動能力指標として、「スクワット動作」「爪先立ち動作」「踵立ち動作」の可否を評価した。分析は、脳・神経疾患患者の転倒経験および転倒関連要因の保有状況を記述し、疾患群が転倒経験におよぼす影響について他の転倒関連要因を補正したロジスティック回帰分析を行った。その後疾患別に層化し、静的・動的バランス指標および簡易運動能力指標による過去1年間の転倒経験の保有のオッズ比を多重ロジスティック回帰分析を用いて算出した。</p> <p>【結果】調査協力に同意の得られた脳・神経疾患患者195名（応諾率92.9%）中、データの一部欠損などを除いた192名を分析対象とした。パーキンソン病患者は脳卒中患者に比べて過去1年間の転倒経験保有者の頻度が多変量調整後も有意に高いことが示された（オッズ比:2.29, 95%信頼区間:1.06-4.64）。過去1年間の転倒経験に対するバランスおよび簡易運動能力指標の影響を疾患別に検討した結果、脳卒中患者ではFunctional Reach Test 15cm未満の者は15cm以上の者に比べて約5倍転倒経験保有者を認めた（オッズ比:4.92, 95%信頼区間:1.40-17.27）。パーキンソン病患者では、スクワット動作不可能な者は可能な者の約5倍の転倒経験保有者を認めた（オッズ比:5.38, 95%信頼区間:1.18-24.47）。</p> <p>【結論】脳・神経疾患患者において、過去1年間の転倒経験の有無と関連する静的・動的バランス指標および簡易運動能力指標は疾患群により異なっており、脳卒中患者ではFunctional Reach Test、パーキンソン病ではスクワット動作が過去1年間の転倒経験と関連することが示された。これらの指標はベッドサイドでの測定が容易であり、今後は追跡調査により個々の疾患群における転倒予測力を明らかにすることが必要と考える。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)
 2. ※印の欄には記入しないこと。